

後ろ髪を引かれて



加藤 真悟

大阪・自然寺住職

ひとり身の彼女は、ある年の夏、医師から胃がんの宣告を受けました。しかし、八十歳を超える高齢ということもあって、手術は受けられずに、緩和ケアの病院に入院することを選ばれました。入院をされた日から、私は幾度か彼女の病室を訪ねては、その様子をうかがっていました。ところが、ある日の早朝、彼女から連絡が入りました。

「昨日、ベッドから落ちてしまいました。足の骨を折ってしまったので、明日、手術をすることになりました。」

それを聞いた私は手術の翌日、お見舞いに行きました。

部屋に向かうと、何やら叫び声が聞こえてきます。その声は、部屋に近づくにつれて大きくなり、中に入ると彼女自身が叫び声を上げていました。看護師の肩をつかみながら、大きな声を目いっぱい張り上げている彼女を見て、私は「どうなさったんですか？」と看護師に尋ねました。「身動きが取れないことへのいらだちと、ふがいなさがおつらいんだろうと思います」とのことでした。その看護師が「かわってもらえませんか？」と、私に肩をつかまれる役を交代してほしいと言われるので、「わかりました。どれくらいこの状態は続きますか？」と尋ねました。

「薬を飲まれたので、あと三十分ほどで休まれます」

「三十分か…」と私は思いながらその場にいたのですが、三十分経っても二時間経っても、いっこうに彼女が休む様子はありません。「早く寝てくれたら…」と思い始めた頃、